

備蓄血O型赤血球製剤有効利用の経過と効果について

◎橋本 実優¹⁾、高山 好弘
戸田中央医科グループ(TMG) 熱海所記念病院¹⁾

輸血用血液製剤(以下血液製剤)の適正使用と貴重な資源を無駄にしないための取り組みは血液製剤を使用する医療従事者の責務である。当院は熱海市、東伊豆地区救急医療の中心的役割を担っている施設であり、危機的出血時に対応するために各型2単位の備蓄血を置いていたが、廃棄血が多いために2014年に備蓄血を見直し、O型赤血球製剤2単位とした。廃棄血は年々減少したが、静岡県内、同グループ内ではまだ廃棄率が高い状態であった。更なる廃棄血削減案として、備蓄血O型赤血球製剤の有効案を提案し廃棄血削減に繋げることが出来た。今回は備蓄血O型赤血球製剤の有効利用案の経過とその効果について報告する。

「目的」

更なる廃棄血削減の取り組みとその効果について

「対象・方法」

- ① 2014年～2016年の血液製剤統計資料を基にT&S準備血をO型赤血球製剤で対応するまでの経過報告
- ② T&S準備血をO型赤血球製剤で対応した時の2014年～2016年の予測廃棄率、予測廃棄額と2017年、2018年赤血球製剤の廃棄率、廃棄額について

「結果」

- ① T&Sの依頼件数は外科が多く、整形外科からの依頼は年々減少していた。T&S準備血の使用率は外科では0%から10%程度であった。T&S準備血が年間100単位～150単位在庫血になっていた。O型異型輸血の実施は外科だけであったことより、外科手術のT&S準備血を備蓄血であ

るO型赤血球製剤にする案を輸血療法委員会に提示した。

- ② 血液製剤の予測廃棄率は6.0～12.2%が2.2%～6.4%となり、予測廃棄額は39万～74万円が12万～34万円となった。2017年、2018年の血液製剤廃棄率と廃棄額は、2017年が4.6%、26万円、2018年が1.8%、10万円となった。

「考察」

当院の廃棄率だけ見ると年々減少していたが、他施設の廃棄率と比較するとまだ高い施設であった。その大きな要因がT&S準備血が使用されず廃棄されていた事であった。外科において緊急時O型赤血球製剤の使用がされていたことから、外科のT&S準備血を備蓄血O型赤血球製剤で対応してもらったことで、廃棄率と廃棄額が予測した通りに削減された。自施設の廃棄率を理解するためには、他施設の廃棄率と比較することが必要であり、その情報を提示することは更なる削減に繋げる理由として有用であると考え。今後の課題は、外科以外のT&S準備血をO型血で対応してもらうための働きかけをすることが必要と考える。臨床側に的確な情報を提供することとコミュニケーションを取る事が廃棄血削減への近道と考える。

「まとめ」

備蓄血であるO型赤血球製剤を有効利用することは、廃棄血の削減に繋がる。

連絡先：0557(82)3000 内線 860